「人をしあわせにできるのは人しかいない」

JICA海外協力で卓球ボランティア コスタリカの若者を指導

コスタリカの子供たちに卓球を教える橋本さん

「信頼関係の大切さを学んだ」

卓球同好会の橋本翔さん（文4）

卓球同好会に所属する橋本翔さん（文４）は2017年3月から２年間、国際協力機構（JICA)の青年海外協力隊（現JICA海外協力隊）事業に参加した。休学して海を渡った中米・コスタリカの地で卓球ボランティアとして活動し、大学生活で一番と言っていい、得がたい貴重な経験をした。

「サッカーが一番」というお国柄だが、子供たちは卓球にも夢中で取り組んだ

押し付けの指導を反省

18歳以上と以下、15歳以下、13歳以下など、年齢別にコスタリカ代表クラスの力量のある若者に卓球を教えた。コスタリカ卓球協会に雇用されたキューバ人のベテランコーチ、リカルドさんと常時、約40人の指導を受け持った。スペイン語やコスタリカの国民性、慣習、宗教などの研修を３か月積んだとはいえ、最初の年はまずコミュニケーションを図ること、意思疎通に悩んだ。

2017年12月、一度だけ感情的になって選手たちを叱ったことがあった。リカルドさんがクリスマス休暇でキューバに帰国中で、ポルトガル人コーチを招いた代表合宿でのことだった。技術指導だけでなく、礼儀やあいさつ、きちんと物を片付けることなどを毎日、口酸っぱく教えていたが、なかなかできるようになってくれない。代わってごみを片付けるポルトガル人コーチの姿を見て、選手たちへの憤りを抑え切れなかったからだ。

ただ、はたと気づき、自省した。「どうしてそうするかという理由も説明せず、一方的に自分の考えや日本流のやり方を押し付けていただけではないか」。以後、選手の意見に耳を傾けるように心がけると、自分の話もよく聞いてくれ、「なぜ日本ではそうするのか」と質問されるようになった。意思疎通が円滑になり、12歳の選手からは「教え方が上手になったね」と親しみを込めて笑顔を返された。

指導した選手が世界選手権に出場

指導していたアルフレッド・サンチェス選手（15）が、2018年8月の中南米大会の個人戦（15歳以下）でベスト４に入り、２か月後に日本で開催された大陸対抗の世界選手権に出場した。橋本さんにとっては故郷に凱旋帰国した形だ。

サンチェス選手は橋本さんを信頼し、中南米大会でベンチコーチを務めてほしいと依頼した。試合で負けて落ち込み、「（ムードを変えるため）別のベンチコーチに代わろうか」と水を向けても、「次も頼みます」とお願いされた。このとき、選手と信頼関係を築くことの大切さを痛感したという。

被災地での
卓球指導の思い

「惜しまれてコスタリカを離れることができました。10歳の女子選手は泣いて見送ってくれた。ボランティアは何かを与える側というイメージがあるけれど、僕がたくさんの人に支えられて、しあわせにしてもらえました」

そして、大学1年の夏を思い起こしたという。東日本大震災の被災地支

援の一環で、宮城県気仙沼市の中学生に卓球を指導したときの記憶だ。最初は「自分に何ができるのだろう」と感じていたが、一緒に球を追う中学生が笑顔になってくれた。「自分にできる貢献の仕方があると教わった」と振り返り、「人をしあわせにするのは人。モノだけじゃないと気づいた」とも。2年間のコスタリカの経験で同じ感情を抱いた。

卓球を通して若者たちと向き合う中で、自身の視野や見聞、人間性を大きく広げた橋本さん。休学期間を含め、少しだけ長くなった大学生活から、晴れの卒業の日を迎えた。

大陸対抗の世界選手権に出場したサンチェス選手と橋本さん

電車の中づり広告が引き寄せたJICAボランティアとの出合い

橋本翔さん

神奈川県立多摩高校卒業、文学部4年（人文社会学科東洋史学専攻）。中学、高校と卓球部に所属、高校2年のとき神奈川県大会団体戦ベスト８。JICA青年海外協力隊ではコスタリカ卓球協会に配属され、国内選抜チームの代表コーチを務めた。首都のサンホセに２年間、ホームステイした。

大学3年の夏休みに学生向けのスタディーツアーに参加し、フィリピンの貧困地区の生活支援を行うNGO活動に参加するなど、もともと国際協力に関心があった。就職活動をしていた４年生の春、電車内で、卓球をする女性の写真が載ったJICAボランティア募集の中づり広告に目を奪われた。「国際協力と卓球。これだ」。応募書類を整え、１週間後には申し込んでいたという。

平和教育の継承に課題

FLP松田ゼミ

第2弾　沖縄の夏合宿取材から　学生の報告

ジャーナリズムについて学ぶFLP松田美佐ゼミの学生たちによる報告の第2弾。
沖縄夏合宿の中で、高校の平和教育、ひめゆり平和祈念資料館の展示などについて
考察を深めた2人が報告します。

ひめゆり平和祈念資料館で取材をするゼミ生の三井ありすさん（左）

Report 1

『沖縄の平和教育 ～戦争を知らない世代だけの時代へ向けて』

第二次世界大戦末期の沖縄戦から今年で75年を迎える沖縄の平和教育が変化を求められている。実際に沖縄戦を体験し、語りついできた語り部たちは高齢化し、亡くなる人も少なくない。戦争の悲惨さを後世に伝える「ひめゆり平和祈念資料館」（糸満市）では、開館した1989年に27人いた語り部が2015年には３人に減り、語り部の体調などを考慮して体験講話は中止している。体験者の生の声を聞けない若い世代が増えるなか、学校教育の現場では、いかに平和を受け継ぐ授業を続けていくかが課題となっている。

三井ありす
（文3）

同じ人の話ばかり…授業が形式化

「同じ人の話ばかりで、授業が形式化している」。私立興南中学・高校（那覇市）の男子生徒は毎年、「平和教育」の授業で、沖縄戦について同じことを教わり、同じ体験者（語り部）の話を聞かされるという。

平和教育の授業の背景には、沖縄戦などで多くの若者が命を失ったことを教訓に「教え子を二度と戦地へ送らない」という思いがある。沖縄戦の概要の説明のほか、ひめゆり平和祈念資料館や学校近くの戦争跡を訪ねたり、体験者の講話を聞いたりすることが中心である。

「『体験者以上に（中身のある）話ができない』などの理由で講話を授業に取り入れる。マンネリ化は感じる。生徒は一種の“教育慣れ”の状態に陥り、授業を聞かなくなる」。そう話す興南高の門林良和教諭は平和教育の現状に危機感を覚える一人だ。沖縄戦の概要は理解するものの、生徒が自分自身の頭で戦争について能動的に考えなくなるという。

そこで気付かされるのは、語り部だけに頼った受け身型の授業から、実体験のない世代が教訓を伝える内容へと変わる必要があるということだ。

次世代の平和講話

毎年、約2000校の学校・団体が見学に訪れるひめゆり平和祈念資料館は、すでに2015年から、語り部だけに頼らない次世代プロジェクトを始動させている。その一つに「次世代の平和講話」がある。元ひめゆり学徒隊の証言を映像で見た後、戦争体験のない説明員から15分の解説を受けられる。

「戦争中の話より、ひめゆり学徒隊だった彼女たちが戦後どう生きてきたのかという解説が中心です」と同館職員の前泊克美さんは話す。当時の出来事は話せても、友達を残してきたことなどの後悔の思いが消えず、戦後どう生きてきたか思い出せずにいたり、話したがらなかったりする人も多い。そうした胸の内を「沖縄戦の３カ月の体験が彼らにとって人生から切り離せないものになった」と戦後世代が第三者の視点をもって代弁し、「戦争で生き残ってよかったと果たして言い切れるのか。必ずしもそうではないのではないか」という考察に値する問題の提起にもつながる。

ＮＰＯ法人沖縄平和協力センターの仲泊和枝さんは、「沖縄戦の３カ月に限定した授業ではなく、前後の出来事などを含めて多角的な視点で問いかけることが、平和の尊さを生徒が自主的に考えるきっかけとなるのではないか」と強調し、授業をどう理解し、自分なりに考えたのかを語り合うワークショップのような場を設けることを提唱する。

自分の頭で考える大切さ

「戦争はだめだという押し付けをしているわけではない。誰かに教わっただけの意見でなく、授業から何かしらの気づきを得て、自分なりの結論を見つけてほしい」と興南高の門林教諭は言う。生徒たちに平和を身近なテーマとして考えてほしいという。

大学で教育を受け、自由な思想を述べることができる私たちの社会は、戦争を経験した世代や、亡くなった多くの方々の犠牲の上に築かれている。沖縄県教育委員会職員の石垣真仁さんは「教育とは平和をバトンタッチすること」と話した。次の世代に向けて、私たちは戦争から学んだ教訓を継承しなければならない。

そして戦争を体験した世代がいなくなる時代がいずれ訪れる。平和とは恒久のものではない。いま一度、身近なものとして平和を議論し、向き合う時機が私たちに訪れているのではないだろうか。

Report from Okinawa

『変化に直面する教育現場』

昨年8月15日は74回目の終戦記念日だった。私たちは戦争のあった時代からどんどん遠ざかっている。戦争体験者が減り、戦争を知らない世代だけになるのもそう遠い未来ではない。平和教育に力を入れている沖縄県は苛烈な地上戦のあった地であり、多くの住民や生徒の命が失われた。沖縄の平和教育は「二度と教え子たちを戦場に送らない」ということが目的だが、戦争体験者から生の声を聞く機会もなくなってきている中で、平和学習の在り方や取り組み方も変化に直面している。沖縄県ではどのように平和教育を行い、何を次世代に伝えようとしているのだろうか。

北谷梨夏
（文3）

平和教育「前と同じような内容」

「平和学習への“慣れ”により、授業がパターン化、マンネリ化している」と話すのは私立興南中学・高校（那覇市）の社会科担当の門林良和教諭。沖縄県の学校では6月23日の「慰霊の日」を中心に毎年、平和学習を行っている。門林教諭によると、沖縄戦について学ぶことを「もう十分だ」と感じている沖縄の中高生は多いという。

生徒たちはもちろん、「どれだけの人が犠牲になり、戦争がどれくらい恐ろしいものか」を理解している。それでも、ある生徒は「小学生のとき、前年度と同じ方が体験者として戦時中の話をしてくれたことがあった。前と同じような内容でした」と漏らした。平和教育の大切さは分かっていても、内容自体には必ずしも満足していないのだ。

教員向けの研修も行う「ひめゆり平和祈念資料館」（糸満市）は、2004年にリニューアルした。戦争体験者の講話を聴くことが困難な時代に備え、これまでとは違う新たなアプローチを伴うリニューアルだった。人が戦争の恐ろしさを語っていた方法から、展示物であるモノに語らせるというスタイルへの変化である。

犠牲者の命に思いをはせる

印象的な展示があった。最後の展示室で、ひめゆり学徒隊として亡くなった方々の写真が壁一面に埋

め尽くされていて、とても衝撃を受けた。写真に添えられた説明には、名前だけではなく、ちょっとしたプロフィルの記載があった。『笑顔が素敵な女性』『運動神経がよく走るのが速かった』『読書が好きだった』などと一人ひとりについて書かれ、亡くなった場所や年齢も記されていた。

「ひめゆり学徒隊で多くの犠牲者が出た」。そんな簡単な言葉で片づけてはいけないと感じた。ひめゆり学徒隊ではなく、彼女たちは一人ひとりが素敵な女性であったことに気づかされた。教科書や本に書かれている文字だけでは分からないものが、ひめゆり平和祈念資料館にはあった。

興南高の生徒の平和に対する考えはさまざまだった。「過去の戦争について学ぶ必要があるのか」「平和教育はやるべきだ」などいろいろな声が聞けた。そんな生徒たちの意見を門林教諭は尊重していた。門林教諭は「『戦争＝だめ』と思う必要はない。大人や周りから聞くだけで、そこで思考を停止させてはいけない」と話してくれた。そうしないと周りの意見に流され、たとえば「戦争は良いことだ」という風潮が支配的になったとき、簡単に流されてしまうからだという。

平和教育だけでなく、さまざまな問題について、既存の考えに縛られず、柔軟な考えを持つ必要があるということに改めて気づかされた。

取材で訪ねた那覇市の私立興南中学・高校

FLP
【Faculty-Linkage Program】

全学の「知」が結集した総合大学ならではの教育システム。各学部の授業科目をリンクさせ、新たな知的関心の領域に対応する教育の「場」を設定するプログラムとして、2003年度からスタートした。学部の枠を越えて新たな知的領域を系統的・体系的に学修し、学際的な視点から専門知識の修得と問題解決能力を高めることを目的としている。ジャーナリズムのほか、「環境・社会・ガバナンス」「国際協力」「スポーツ・健康科学」「地域・公共マネジメント」のプログラムがある。